

Ⅲ 遺跡立地からみた古代の上町台地—台地北半部を中心として—

小林和美

1. はじめに

大阪湾に沿って南北にのびる上町台地は、低湿な大阪平野を背後に控え、古代より難波宮など政治・文化の拠点として発展してきた。また畿内において海路の起点かつ終点であるため、玄関口として外交・経済面上の要地でもあった。このように上町台地のもつ史的重要性は、その地理的特質に起因すると思われる。

今回、1990～1996年にかけて実施された大阪府庁舎周辺整備計画に伴う発掘調査の正報告書作成において、昭和36年測図の大阪市地形図（1:3000）¹⁾を入手し、1 m間隔の等高線図を作成することができた。その図によれば、わずか東西幅2 kmにも満たない台地に大小様々な開析谷が入り込む起伏に富んだ様相がうかがえ、必ずしも安定した土地が広がっていたとは理解しがたい。

以下、起伏に富んだ限られた空間において、どのような場で人々の暮らしが展開し、どのような場が歴史の舞台として選択されたのか発掘調査件数も多く、古代の難波地域にあたる台地北半部を中心に検討をおこなう。

2. 上町台地の地形

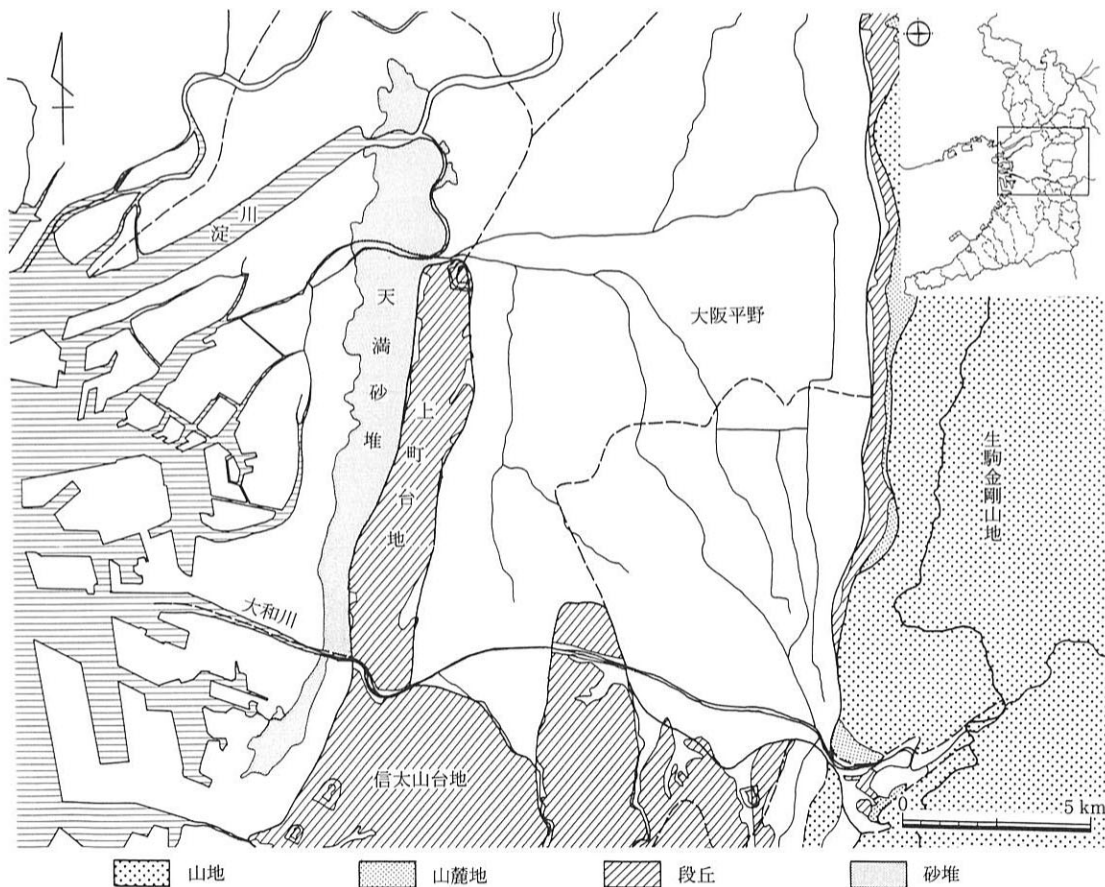


図4-Ⅲ-1 上町台地とその周辺

上町台地は南北長約20km、東西幅2kmと南北に細長い段丘であり、東には淀川と旧大和川が形成した大阪平野が広がり、西には沿岸流が形成した天満砂堆が上町台地に沿って北へのびる。標高は10～25mをはかり、北端に近い法門坂付近が標高約25mと最も高く、しだいに南へと下がる。また法門坂付近を起点とする分水界は、地盤の隆起運動にともなって南にいくにしたがい西へ寄り、台地全体としては東に傾く傾動地塊となっている。そのため台地の西縁では、比高10m程の急斜面となっており、愛染坂や口縄坂などの急坂が続く。一方、東側は北半部では緩斜面に細工谷など大規模な開析谷が発達しているが、南半部では非常に緩やかな傾斜でもって平野部へ移行する。

昭和36年等高線図では、すでに市街地化していたが、高度経済成長の大規模開発が行われる以前の上町台地を詳細に捉えることができる。従来、オリジナルに近い地形を概観するために明治22年作成の仮製図が利用されることが多かったが、仮製図では台地北半部が市街地化により等高線が記載されていないため、この図により台地北半部の様相を把握することが可能である。だが改めて言うまでもなく、上町台地は古代より難波宮造営や豊臣秀吉の大坂城下町の建設などによって、その都度地形が改変されており、古代の上町台地と必ずしも等しいとは言えない。実際、台地北西部付近にみられる方位にのった直線状の等高線は難壇状に造成された城下町の痕跡や近世以降の瓦土取り跡の可能性が高く、人工改変の著しさがうかがえる。しかし、昭和36年等高線図も上町台地の特質を把握するうえで一定の有効性をもつものと考えられる。その一環として、上町台地北端の発掘調査において検出された地山の傾斜方向とレベルをみてみたい。まず地山の傾斜方向をみると、現在の傾斜方向とはほぼ一致していることがわかる。また地山までの深さの分布をみれば、地山から3m以上堆積しているのは谷の縁辺など傾斜変換線上に集中していることがうかがえる。おそらく狭い台地上で少しでも平坦面を確保するため谷の縁辺から埋めていった可能性が高い。すなわち、かつての景観としては谷の規模はさらに大きいものと推定



図4-III-2 地山の傾斜と深度

され、この点を考慮すれば昭和36年等高線図の利用も無意味なことではなかろう。

3. 遺跡の変遷

(1) 縄文・弥生時代

上町台地において人々の生活が始まるのは、現在のところ縄文時代に入ってからである。早期から前期の土器が、勝山遺跡²⁾（図4－Ⅲ－3～5の地点、以下同じ）・宰相山遺跡³⁾・森の宮遺跡^{4・5)}で確認され、晩期には難波宮跡でも土器が出土している⁶⁾。

縄文時代から弥生時代にかけて、宰相山遺跡では長原式土器と弥生前期の木葉文をもつ土器が共伴し、森の宮遺跡でも前期の土器が確認されていることから、台地東縁部では縄文時代から継続して集落が営まれ、弥生時代に入っても立地に大きな変化はない。一方、現在の船場地域にあたる台地西側の低地部では、中期以降単発的ながら遺物が確認され、集落が点在していた可能性が高くなっている（松尾1993）。しかし、台地上では中期から後期の遺物がわずかながら阿倍野筋遺跡⁷⁾や大坂城三の丸跡下層⁸⁾で確認されているにすぎず、顕著な集落の存在は認めがたい状況である。

(2) 古墳時代

古墳時代に入っても弥生時

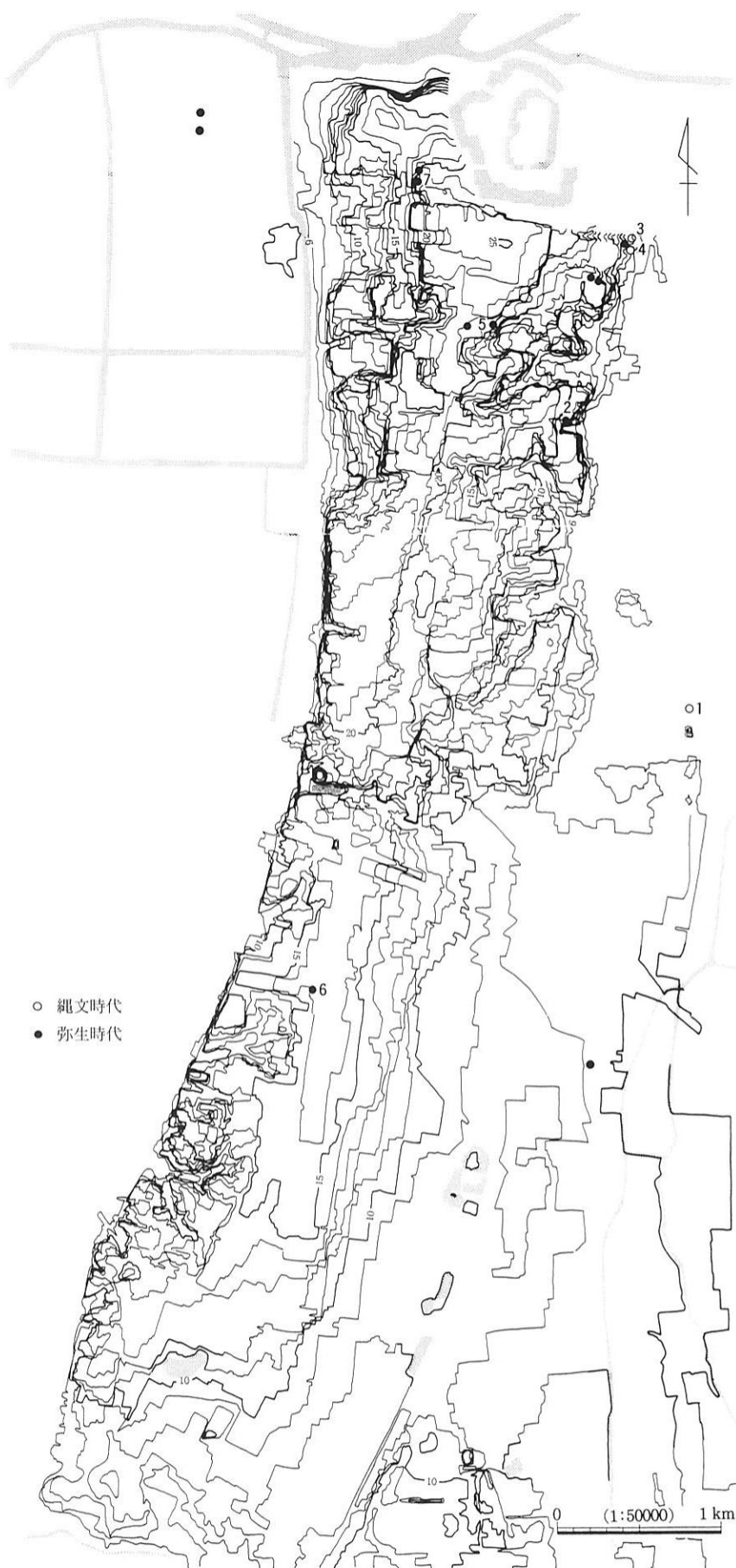


図4－Ⅲ－3 縄文・弥生時代の遺物出土地点

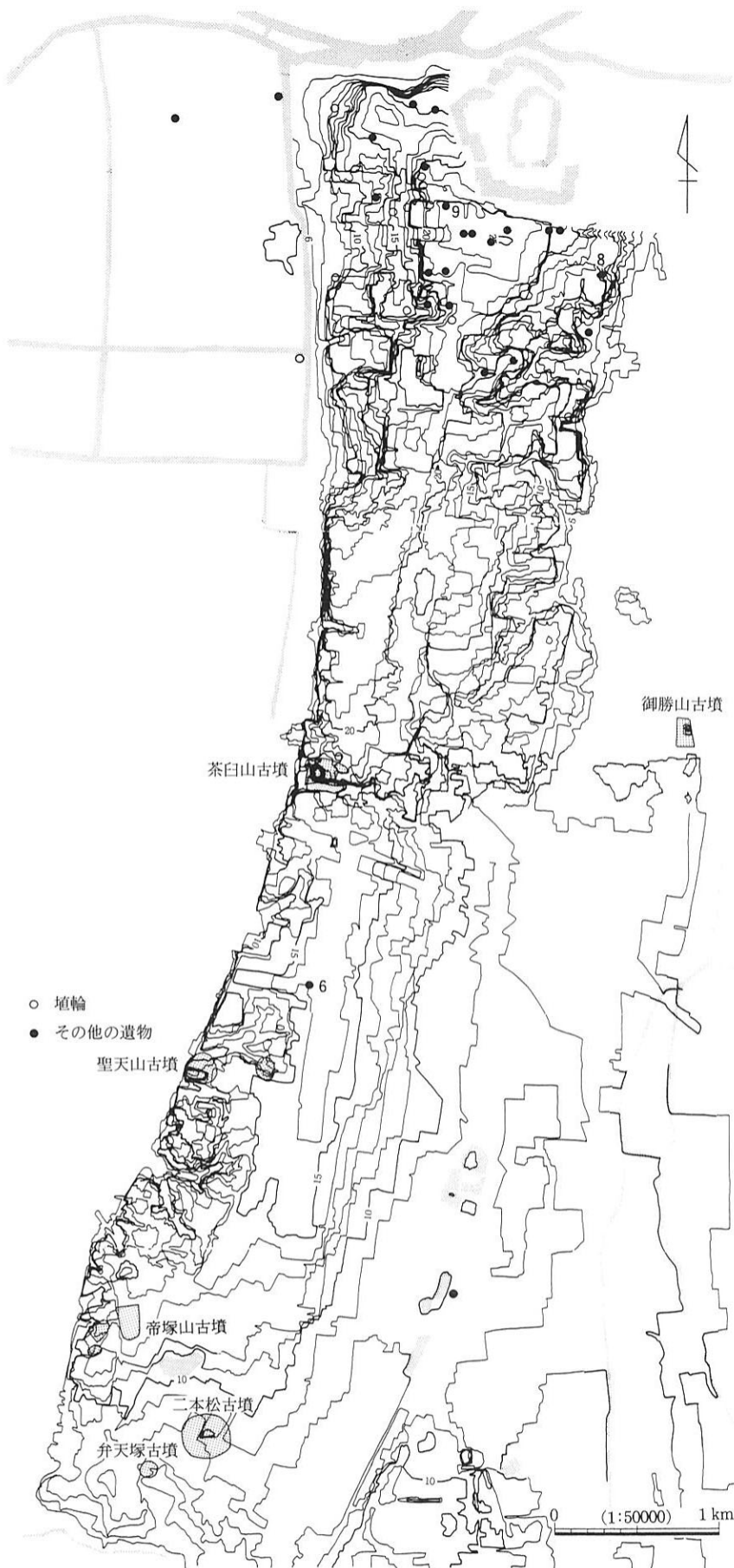


図4-III-4 古墳時代の遺物出土地点

代と大きな変化は認められない。森ノ宮遺跡では古墳時代初頭の一括資料が出土し、集落は継続していたと思われる⁹⁾。一方、この時期明瞭に集落として認められるものに阿倍野筋遺跡がある⁷⁾。古墳時代初頭の掘立柱建物や竪穴住居などの遺構だけでなく、土錘や飯蛸壺など漁労具が多数出土し、漁労を生業の主とした集落が台地上に形成されていたことが明らかになっている。しかし、阿倍野筋遺跡も古墳時代中期には廃絶し、変わって台地北端では標高20m以上の平坦面に古墳時代中期以降の遺物が急増する。この遺跡数の増加は、おそらく現在の大川と考えられる難波の堀江の開削などによって当地域が畿内の玄関口としての役割を果たし始めたからであろう。そしてその中心部には、倉庫群と思われる16棟以上の大型掘立柱建物が整然と正方位に並び、難波の繁栄を如実に物語っている¹⁰⁾。これ以後、難波宮下層遺跡では難波宮が造営されるまで、遺構が途切れることなく検出されており、台地北端の頂上部に難波宮造営につながる下地が形成されつつあったと思われる。

また集落だけでなく古墳時代中期以降、台地の西縁部に古墳が築造される。茶臼山古墳は古墳であるかどうか疑問

が提示されているが¹¹⁾、現在も墳丘が残る聖天山古墳、帝塚山古墳はいずれも比高約10mの急崖に沿うように立地している。これら以外にもすでに消滅してしまった古墳の存在が字名などから推定されているが、その多くが住吉区などに集中し、台地の西縁部に古墳群の存在が推定されている（上田1988）。台地北端でも標高15～20mの西側斜面を中心に5世紀以降の埴輪片が出土しており、頂上部付近で古墳が存在していた可能性が高い。

（3）飛鳥・奈良時代

7世紀以降、上町台地上では難波宮造営に象徴されるように、政治や経済の拠点としての性格を強め、台地上の平坦面に遺構・遺物の出土地点が急増する。その中心となる難波宮は台地北端の頂上部において前期・後期難波宮大極殿や官衙域が検出されたほか、宮域の北西では谷地形を利用した大規模な石組み溝と池状の水溜が検出されている¹²⁾。

京域に関してはその存在も含めて不明な点が多いが、難波宮周辺では台地の尾根筋上の平坦部に遺構・遺物が集中している。四天王寺の北側では「米家」と書かれた8世紀中頃の墨書土器が井戸から出土しており、文献に記された

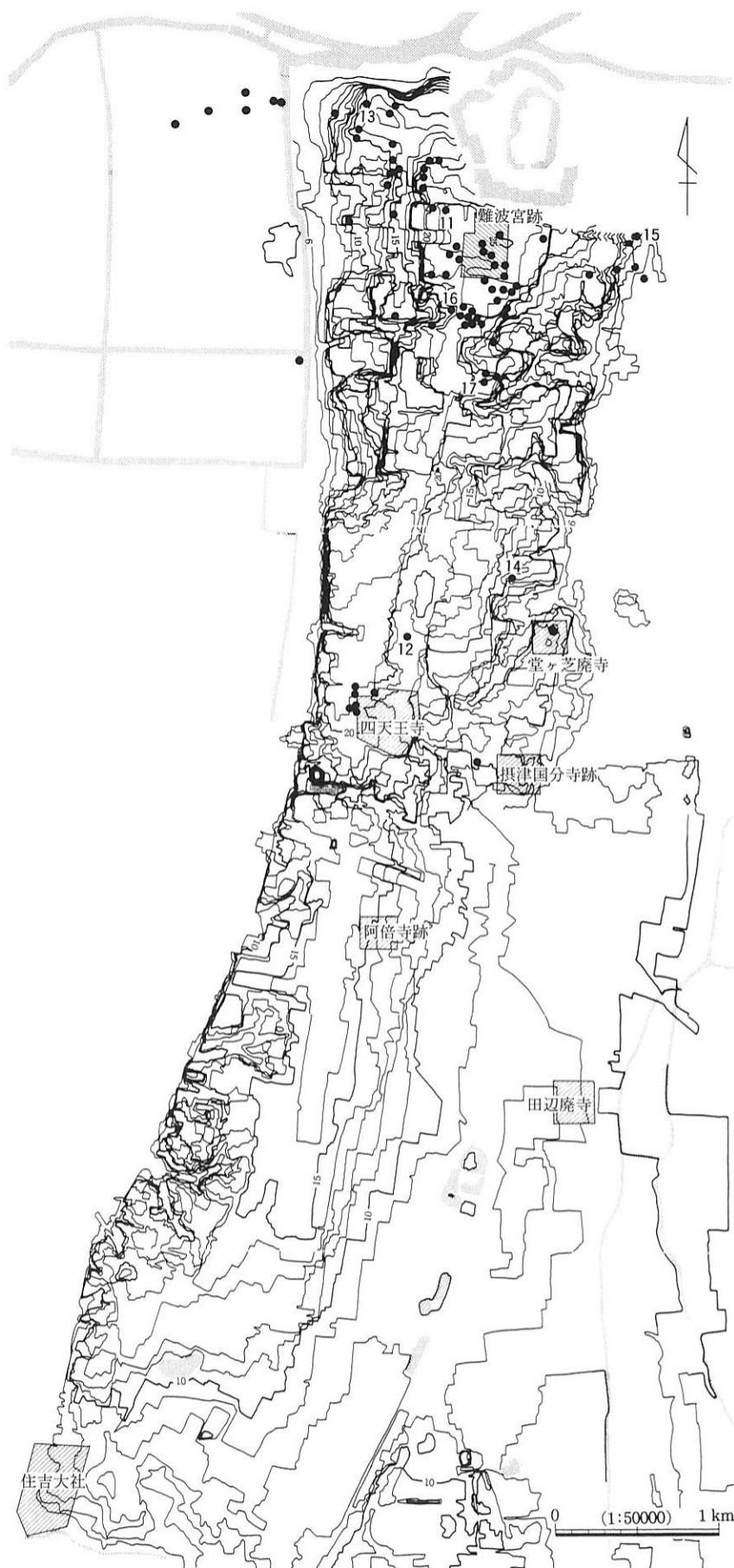


図4-III-5 飛鳥・奈良時代の遺物出土地点

「難波市」との関連が注目されている。¹³⁾ また従来京域外と考えられてきた大川に面した台地北端部では、奈良時代の建物群や井戸などの遺構が集中しており、難波宮の玄関口としての施設が建ち並んでいた可能性が高い。¹⁴⁾

一方台地の尾根筋だけでなく、台地東縁の開析谷の斜面上に立地する細工谷遺跡¹⁵⁾では、谷の中心部に流れ込む溝から和同開珎の枝銭や埴塼などの金属加工関連遺物が多数出土している。森の宮遺跡においても7世紀後半の土器が出土する溝から斎串や舟形木製品が出土し、水辺の祭祀が行われていたと思われる。¹⁶⁾

また古代寺院も今に法灯を伝える四天王寺をはじめ、台地中央部に「百済寺」と推定される堂ヶ芝廃寺や摂津国分寺などが伽藍を構えていた。細工谷遺跡でも「百済尼」や「尼寺」などと記された墨書土器と尼寺の存在を示す木簡や多数の瓦が出土していることから、遺跡北側の台地上に「百済尼寺」が建立されていたと推定され、台地中央部の開析谷周辺に寺院が密集していたことがうかがえる。

4. まとめ

最後にこれまでみてきた遺跡の立地を限られた空間における地形利用の視点からまとめておきたい。

縄文・弥生時代を通じて森の宮遺跡を除けば、遺構・遺物も乏しくいずれも単発的な集落であったと思われるが、その分布は東縁部に偏っている。森の宮遺跡や宰相山遺跡では、河内湾から河内湖への変遷が確認されていることから、縄文海進時の汀線が台地の縁辺部にまで迫っていたことがうかがえ、外海より穏やかな河内湾・河内湖をのぞむ開析谷の縁辺部でわずかに集落が形成されていたにすぎないと考えられる。

しかし、古墳時代中期以降になると台地や開析谷の縁辺だけでなく、台地の尾根筋上にあたる標高15～20m付近の平坦面に遺構・遺物が急増する。おそらく先述した難波の堀江の開削に伴い、大型掘立柱建物群のような大規模な公的施設の造営のため、頂上部の平坦面の利用が始まるのであろう。細工谷遺跡で実施された花粉分析では、森林状態であった台地北半部が中期中葉頃に急激に開発されたと推定されており、遺跡数の増加とも一致する（金原1999）。

一方、上町台地上に築かれた古墳は御勝山古墳以外は西縁の段丘崖に沿って立地しており、段丘崖の比高が5m近くあることから、おそらく海上からの景観を意識したものと思われる。さらに視野を南に広げると、堺市百舌鳥古墳群や岬町淡輪古墳群も段丘崖に沿って立地しており、大阪湾沿岸における古墳立地と連動していると考えられる。

白雉元年（650）の難波宮造営は、上町台地において象徴的なできごとであるが、その立地をみると台地頂上部の平坦面に位置し、その南側には東西から開析谷が入り込んでいる。その結果、あたかも南側の京域とは分断され、宮域だけ独立した空間にあるかのような印象を与える。このように象徴的な場を利用するのは難波宮だけでなく寺院の立地も同様である。堂ヶ芝廃寺、摂津国分寺とも谷の浸食によって岬状に取り残された台地の先端部にあり、東に広がる平野部に向けて荘厳な伽藍をさらに際立たせる立地といえる。細工谷遺跡の北側に推定される「百済尼寺」も堂ヶ芝廃寺の対岸にあたり同様の立地である。また四天王寺は北東と南東方向にのびる谷の谷頭部に接し、尾根筋上の安定した平坦面に広大な伽藍を構えており、国家鎮護の寺として東の平野部だけでなく、古墳と同じく西の海上からの景観も意識した立地と考えられる。このように周囲より高く台地の先端にあたる場所では、建物の偉容をアピールする施設が造営され、谷など周囲より低い場所では細工谷遺跡や森の宮遺跡でみられたように手工業

や祭祀の場として利用され、地形を効果的に利用していたことがわかる。

さらに難波宮造営に際し1 m近く盛土を行ったり、方位より地形に規制された建物配置が、7世紀中頃から方位を優先した建物群がみられるなど地形を克服しようとする動きも認められる¹⁷⁾。すなわち、飛鳥・奈良時代の上町台地は、限られた空間において地形を有効に利用するとともに、地形の克服を試みるなど多様な地形利用の結果、古代難波の景観が形成されていたと考えられる。

5. おわりに

上町台地という起伏に富んだ限られた空間において、どのような場が歴史の舞台として選択されたかみてきたが、効果的に地形を利用していたことがわかった。本稿では、台地北半部だけを検討の対象としたが南半部の住吉周辺も検討し、難波と住吉を合わせた上町台地全体の地域性を考察する必要がある今後の課題としたい。

謝辞

執筆の機会を与えていただいた鋤柄俊夫氏には、小稿を成すにあたり示唆的なご意見、ご教示を多数賜りました。末筆ながら記してお礼を申し上げます。

小稿は拙稿1999「遺跡立地からみた古代の上町台地—台地北半部を中心として—」『文化財研究』第16号の再録である。

註

- 1) 大阪城本丸の南端ライン以北は、1:10000地形図（平成3年発行）より作成し合成した。また台地中央部の西縁は急傾斜地であるため、等高線は2 m間隔である。
- 2) 松本百合子1991 「はじめまして勝山遺跡です」（『葦火』31）
- 3) 松尾信裕・積山洋1996 「河内湾の岸边から—天王寺区宰相山遺跡出土の縄文土器—」（『葦火』63）
- 4) 森の宮遺跡発掘調査団1972 『森の宮遺跡第1・2次調査報告』
- 5) 財大阪市文化財協会1996 『森の宮遺跡Ⅰ』
- 6) 財大阪市文化財協会1980 『昭和53年度難波宮跡緊急発掘調査報告』
- 7) 財大阪市文化財協会1999 『阿倍野筋遺跡発掘調査報告』
- 8) 財大阪文化財センター1993 『大坂城跡の発掘調査』3
- 9) 難波宮址顕彰会1978 『森の宮遺跡第3・4次発掘調査報告』
- 10) 財大阪市文化財協会1992 『難波宮址の研究』第九
- 11) 趙哲済1986 「「茶臼山古墳」の調査」（『葦火』4）
- 12) 佐藤隆・李陽浩1998 「巨石を用いた前期難波宮の石組み溝」（『葦火』73）
李陽浩・佐藤隆1998 「池状水溜め、水溜め木枠」（『葦火』74）
- 13) 植木久1986 「難波宮および難波京内出土の墨書土器」（『葦火』4）
- 14) 伊藤純1991 「西成郡美努郷の一隅」（『葦火』30）
- 15) 財大阪市文化財協会1999 『細工谷遺跡発掘調査報告Ⅰ』
- 16) 財大阪市文化財協会1996 『森の宮遺跡Ⅱ』
- 17) 財大阪市文化財協会1991 『平成2年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』
- 18) 財大阪市文化財協会1991 『上町台地の遺跡』

引用・参考文献

- 上田宏範1988 「大阪市域の古墳」（『新修大阪市史』第一巻）
金原正子1999 「細工谷遺跡の古環境復元」（『細工谷遺跡発掘調査報告Ⅰ』）
松尾信裕1993 「船場成立以前—考古学調査の成果から—」（『ヒストリア』139）